10. 復興・生まれ変わる神戸税関

神戸税関本関（平成 8 年 3 月 22 日起工、平成 10 年 11 月 26 日使用開始）
神戸税関の 3 代目の庁舎は、旧本館庁舎を新庁舎の一部として有効活用し、地上 10 階、地下 1 階、塔屋 4 階の庁舎で、神戸港のシンボル的建築物となっている。

昭和 2 年に竣工した旧本関庁舎は、神戸港のシンボル的建築物としてランドマークの役割を果たし、平成 5 年には神戸建築 100 選に選ばれるなど市民に親しまれていた。

しかし、建築から約 70 年経過し老朽化が進んだことに加え、平成 7 年の阪神淡路大震災において、本館庁舎をはじめ監視部庁舎、第 1 分館、第 2 分館も損傷を受けて、庁舎建て替えを決定した。建て替えに際して全面的な建て替えかと庁舎の存在が危ぶまれたが、市民からの「時計塔のある外観を残してほしい」との強い要望を考慮して旧庁舎の保存、再生が検討され、本館庁舎を部分的に保存して工事が始まった。そして、貴重な歴史的景観を継承しつつ高度情報処理に対応可能な施設整備を行い、“開かれた税関”として将来にわたって市民に愛され、親しまれる新たな空間の創造をめざし建設された。

新庁舎は、従前 5 つの建物（神戸税関本館、第 1 分館、第 2 分館、監視部庁舎、分庁舎）に分散していた本部機構を集約し、効率的な業務運営と行政サービスを配慮して事務室を配置するとともに、風向・風力・降雨センサーと連動した自然換気システム、雨水利用のための雨水貯水槽や蓄熱層の採用により、省エネルギーと電力利用の平準化を図るなど、地球環境に充分配慮した環境にやさしい庁舎となっている。ロの字型平面であった旧本館の中央部と吹き抜けの通関ロビーを撤去して中庭とし、南北のウイングを延長する形で新館の低層部を設け、このウイングに挟まれた空間に新たなエントランスホールとなるアトリウムとその直上に浮かぶように高層階が建つという構成で、その姿は“船”をイメージしたデザインとなっており、旧本館の時計塔と呼応して神戸港の新しいシンボルにふさわしい建築物として平成 10 年に生まれ変わった。

また、税関の重要な任務の一つであるけん銃や麻薬等の国内の流入を防ぐためには、市民の理解と協力が不可欠であることから、新庁舎では税関の仕事、役割を多くの方に理解してもらうため広報展示室、中庭等を開放するなど益々市民との連携を密接にしている。

さらに震災によって、仮庁舎に移転していた摩耶埠頭出張所、東灘出張所、麻薬探知犬管理センター、神戸外郵出張所（神戸中央郵便局内）もそれぞれ平成 9 年に新庁舎が完成し、税関業務を再開し、「社会悪物品の水際での取締り」「適正かつ迅速な通関の確保」の実現をめざし、神戸税関職員が一丸となって業務に取り組んでいる。